

# ひょうご伝説紀行

- 語り継がれる村・人・習俗 -

## 和泉式部と桑の木 和泉式部と村人、ふれあいの物語



**伝説** 和泉式部と桑の木  
和泉式部と村人、ふれあいの物語

**紀行** 和泉式部の足跡を訪ねる

- ・和泉式部という女性
- ・桑原の里
- ・山陽道に沿って
- ・西播磨の和泉式部

**関連情報** 用語解説  
参考書籍  
所在地リスト

## 和泉式部と桑の木

### 和泉式部と村人、ふれあいの物語

丹波（たんば）のしずかな山里のお話です。

和泉式部（いずみしきぶ）という有名な歌人が、旅のとちゅうでこの村に立ち寄りました。京の都から、役人として丹後国（たんのくに）にいた、夫の元へ行くところでした。

ちょうどその時、ひどい嵐がやってきました。何日も大雨が降り続いて、川はあふれ、村にあった橋はみんな流されて、和泉式部は村から出ることができなくなってしまいました。困りましたがどうすることもできません。そのころは、ひとつの橋をかけるにも、何年もかかったのです。

親切な村の人たちは、式部に家を貸してくれました。それだけでなく、畑でとれた野菜やら、山でとれたいのししの肉やら、お米やら、かわるがわる食べ物も持ってきてくれました。それで、式部はなにひとつ不自由なく、安心して過ごすことができました。

日がたつにつれて、式部にも村のようすがわかってきました。もともと小さな山の村です。ただできえ十分でない田畑が大雨で荒れて、作物も思うようにできなくなっていました。それでも村人たちは、自分の食べる分を減らして、式部に持ってきてくれていたのです。

何とかして村を豊かにできないものか。式部は考えました。そして、村人を集めると、こんなふうに話しました。

「桑（くわ）の木を植えてみませんか。蚕（かいこ）を育てて、絹糸を作るのです。」

村の人たちは、これまで蚕など見たこともありません。

「わしらにできるんやろか。」

「お金がもうかるんやろか。」

「糸なんか、どないしてつくったらええんやろ。」

みんなが口々に話していると、村でいちばんの年寄りがこんなふうに言いました。

「初めてのことやけど、式部さんが言わはるんやからまちがいないやろ。みんなで力合わせて、頑張ろうやないか。」

次の日から、大人も子どもも力を合わせて山を開き、桑の木を植えてゆきました。三年がすぎるところ、山には立派な桑畑ができ、どの家も蚕を飼うようになっていました。村人たちはみんな、一生懸命に働いたので、繭（まゆ）もたくさんとれるようになってきました。

「うそみたいやのう。」

「みんなでよう頑張ったおかげや。」

「式部さんのおかげや。」

村の人たちは、暮らしが豊かになることを夢に見ながら、喜び合いました。繭からつむいだ糸で、きれいな布を織ることも覚えました。

やがてあの大雨で流された橋もできあがり、式部が丹後へ旅立つ日をむかえました。

桑原の 里に引くまゆ 拾い置きて 君が八千代の 衣糸にせん

こんな歌を残し、なごりをおしみながら、式部は村を去ってゆきました。

それからもみんなが力を合わせたおかげで、桑畑はよくしげりましたので、だれ言うとなく、この村は桑原と呼ばれるようになりました。

今でも桑原村のまんなかには、式部をしのぶ供養塔（くようとう）があって、村の人たちがいつもきれいな花をおそなえしています。

## 紀行「和泉式部の足跡を訪ねる」

### 和泉式部という女性

和泉式部（いずみしきぶ）は、平安時代中ごろ（10世紀末ごろから11世紀前半）に生きた女性であるが、生没年ははっきりしないようである。父は越前守（えちぜんのかみ）だった大江雅致（おおえのまさむね）、母は平保衡（たいらのやすひら）の娘である。

式部を有名にしているのは、何と言っても和歌であろう。中古三十六歌仙、女房三十六歌仙などの中にも選ばれていて、身近には小倉百人一首の「あらざらむ この世のほかの 思ひ出に いまひとたびの あふこともがな」という歌を思い出す人も多いかもしれない。

最初の夫であった和泉守橘道貞（たちばなのみちさだ）との間には、後に小式部内侍（こしきぶのないし）と呼ばれる娘が生まれたがやがて別離し、その後は数多くの恋愛を重ねて、藤原道長（ふじわらのみちなが）からは「浮かれ女」と呼ばれたという。後に藤原保昌（ふじわらのやすまさ）と再婚して、夫が赴任した丹後（たんご）に下ったとされているが、晩年のことはほとんどわからないらしい。

和泉式部の伝説は、北海道から九州までの広い範囲に、数多く残されている。そのほとんどは史実とは異なるものだけれど、一方で、彼女の歌とともに、その伝説が多くの人から愛されたことは間違いないだろう。

### 桑原の里

桑原（くわはら）は、篠山市（ささやまし）の中心部から10km余り北にある。丹波市（たんばし）との境界に近い栗柄峠（くりからとうげ）の少し東から、曲がりくねった細い山道を通るか、さらに東の本郷から箱部峠（はこべとうげ）方向へ向かうと、このおだやかな山里に至る。

由良川（ゆらがわ）の最上流部にあたる友渕川（ともぶちがわ）から、さらに分岐した細い川が、村の中を流れている。その左右の斜面に、ひな壇のように小さな田があり、尾根の上や斜面に沿って村の家々が並ぶ。和泉式部の供養塔は、村の北側に張り出した小さな尾根の上に建っている。



桑原の村から  
和泉式部供養塔を見る



供養塔の麓から



木立の中にある  
供養塔



和泉式部の供養塔

尾根の先から急な階段を登ると、小さなお堂がある。お堂には扉も壁もないが、奥には仏様が納められている。その奥に、たくさんのお地藏様と一緒に、和泉式部の供養塔だという小さな宝篋印塔（ほうきょういんとう）が並んでいた。

塔の前はきれいに掃き清められ、小さな花瓶には花が挿してあった。杉木立の間から木漏れ日さし込み、その向こうには棚田が見える。村の人たちが大切に祭ってきたのと同じように、式部の塔も、ここから村を守り続けてきたのだろう。

## 山陽道に沿って

山陽道沿いにも、和泉式部の伝説が点々と残されている。伊丹市（いたみし）の北園（きたぞの）には、式部の墓だという五輪塔があり、さらに明石（あかし）、加古川（かこがわ）、姫路、相生（あいおい）へと伝説の場所を訪ねることができる。

明石市魚住（うおずみ）の遍照寺（へんしょうじ）には、『小式部内侍禱（いのり）之松縁起』が伝わっている。それによれば、娘、小式部内侍の死を悼んで、書写山円教寺（しょしゃざんえんぎょうじ）に性空（しょうくう）上人を訪ねた和泉式部は、その帰途、長幡寺（ちょうはんじ）にこもって法華経（ほけきょう）をよむ。すると香の煙の中に、小式部内侍が現れたというのだ。そこで式部は、一条天皇から小式部内侍ゆかりの松を譲り受けて、長幡寺の近くに植え、寺の寂心上人が小式部の供養塔を建てたとされている。



遍照寺



道標

この遍照寺から南へ400mほどの住宅地の中に、和泉式部が小式部を弔うために建てたという五輪塔が残されている。丘の上の住宅地の間にある小さな空間に、大人の背丈ほどの五輪塔が建っている。注意していないと見つけるのも難しいが、今でも花が手向けられ、大切にされている。



小式部内侍供養塔

「小式部内侍禱（いのり）の松」は遍照寺の北、旧西国街道に沿った場所にあったらしい。かつては海からも見える、東西35mにも枝を広げた巨大な松があったというが、今ではその松の木への道程を示す道標だけが残されている。2006年にこの取材をおこなった時には、残念なことに道路工事のために道標は一時的に撤去されていて、見るができなかった。



小式部内侍供養塔



西国街道の道標 ~ここから1kmほどのところに、祈りの松があったらしい~

さらに西へたどると、加古川市野口町坂元では和泉式部供養塔に出会う。旧西国街道に面して建つ宝篋印塔である。この塔は古くから和泉式部の墓だとされていたらしく、今も地元の方が毎日掃除をし、花を手向けて丁寧に祭っている。実際に建てられたのは室町時代のことで、当時の様式をよく残していることから、県指定文化財となっている。

日ざしの明るい通りで塔を撮影していると、学校帰りらしい中学生たちが不思議そうに眺めて通り過ぎて行くのだった。



説明板



和泉式部の供養塔

## 西播磨の和泉式部

書写山円教寺には、和泉式部の歌塚がある。伝説では、一条天皇の中宮彰子に仕えていた和泉式部が、彰子やほかの女房たちとともに性空上人を訪ねたが、上人は会ってくれない。そこで式部は寺の柱に、一首の和歌を書いて立ち去ろうとした。

くらきより くらき道にぞ 入りぬべき はるかに照らせ 山の端の月

この歌に感心した上人は、一行を呼び戻して丁重に教えを垂れたと伝えられている。性空上人は、式部が彰子に仕えるより早く亡くなっているから、この話は事実ではないだろうけれど、詠まれた歌は確かに存在する。

その歌塚は、円教寺奥の院の護法堂奥にひっそりと建っている。仏の救いを求める強い祈りを込めたこの歌を、もし性空上人が目にしていたら、伝説のようなことになっても不思議ではないだろう。書写山に近い姫路市青山には、和泉式部の腰掛け石もあるという。



円教寺奥の院



開山堂裏に立つ歌塚



石碑が立つ山裾

和泉式部  
旧跡の石碑

さらに西へと道をたどると、相生市若狭野町雨内には、「和泉式部宿り木の栗」があった。旅の途中雨に降られた式部が、この地の栗の木の下で雨宿りして、

苔筵（こけむしろ） 敷島の道に 行きくれて  
雨の内にし 宿る木のかけ

という歌を詠んだと伝えられている。



雨内の村

もちろん今はその木もなく、雨内の村の山すそに和泉式部旧跡という石碑が残るのみであるが、数十年前までは年に一度、この場所でお茶の接待がされていたと、石碑の傍に住む老婦人がくり返し語ってくれた。同じ雨内の教証寺には、和泉式部について書かれた古い文書もあるという。同様の話は相生市内的那波にある得乗寺にも伝わっており、この寺の境内の「枝垂れ栗」が、雨宿りの栗の木だったとされている。

伝説はさらに、この雨宿りがきっかけとなって、生き別れていた娘、小式部内侍と和泉式部とが再会したと伝えている。

和泉式部とは、どのような女性だったのだろうか。織り連ねられた数多くの伝説の向こうにもその姿は見えないが、この歌を読むと、ただ恋多き女だったわけではなかったのだろうと思えてくる。

世の中に 恋といふ色は なけれども ふかく身にしお ものにぞありける（後拾遺集）

## 用語解説

### 【和泉式部】いずみしきぶ

平安時代中期の女性歌人。生没年不詳だが、974年あるいは976年生という説がある。父は越前守大江雅致、母は越中守平保衡の娘。和泉式部の名は、最初の夫である和泉守橋道貞の任国と、父の官名に由来する。

道貞との間には、娘小式部内侍（こしきぶのないし）が生まれたが、やがて夫婦の間は破綻して別離。その後は為尊親王（ためたかしんのう）、敦道親王（あつみちしんのう）などとの恋の遍歴があったが、いずれも死別に終わっている。敦道親王との恋愛を物語風につづった『和泉式部日記』は有名であるが、式部本人の著述ではないとの説もある。

後には、藤原道長の娘で一条天皇の中宮であった彰子に仕えているが、この時、彰子の傍には、紫式部、赤染衛門などの歴史に残る人材がいた。

さらに藤原保昌と再婚し、保昌が丹後守に任ぜられると、共に丹後へ下ったとされる。和泉式部が50歳のころ、娘、小式部内侍が亡くなって、式部は悲しみに暮れた。保昌は1036年に亡くなったことがわかっているが、和泉式部晩年の消息はまったくわからない。

現在、残っている歌は1500首を超え、『拾遺和歌集』などの勅撰和歌集には276首もの歌が採録されている。特に恋歌や挽歌などの叙情的な和歌に、天分を発揮した。

### 【和泉式部伝説】いずみしきぶでんせつ

和泉式部の伝説は、東北から九州までの広い範囲に、数多く残っている。それは式部自身の恋多き生涯から多くの伝説が生まれ、それが中世、遊行の女性たちによって各地で語られたためであろう。またこうした女性遊行者が、「和泉式部」を名乗って、式部の伝説や古跡を残したという考えもある。

柳田国男は、式部伝説がこのように多いのは「これは式部の伝説を語り物にして歩く京都誓願寺に所属する女性たちが、中世に諸国をくまなくめぐったからである」と述べている。

このことはまた、世阿弥の作と伝えられている謡曲『誓願寺』で、和泉式部が「歌舞の菩薩（ぼさつ）」として描かれ、後に芸能の世界の人々に和泉式部信仰が生まれたことと無縁ではないだろう。式部の墓所のひとつは、誓願寺に近い、京都市の新京極通りにある。

### 【小式部内侍】こしきぶのないし

平安時代中期の女性歌人（999?～1025?）。父は橋道貞、母は和泉式部。一条天皇の中宮であった藤原彰子に仕えたが、若くして病没。小倉百人一首の「大江山 いく野の道の 遠ければ まだふみもみず 天の橋立」の歌は有名。

当時、小式部内侍の歌は母の和泉式部が代作しているといううわさがあり、中納言藤原定頼が、歌合わせで歌を詠むことになった小式部に対して、「丹後国のお母さん（和泉式部は当時、夫の任国である丹後に下っていた）の所に、代作を頼む使者は出しましたか。使者は帰って来ましたか」などと質問をしたのに対して、その場でこの歌を詠んだという。

その主旨は「大江山を越えて生野（丹後の地名）へと向かう道のりは遠いので、母のいる天の橋立の地を踏んだこともありませんし、母からの手紙もまだ見ていません」という意味である。この当意即妙の歌は、小式部の名を大いにあげたとされる。

## 【長幡寺（長坂寺）・遍照寺】ちょうはんじ・へんしょうじ

伝承にある長幡寺は聖徳太子の創建で、二十八院をもつ大寺院とされ、現在明石市魚住町にある遍照寺は、その塔頭のひとつと伝えられる。長幡寺の正確な位置と規模は不明であるが、魚住町の長坂寺遺跡からは、奈良時代の瓦などが多数出土していることから、長幡寺にあたる説がある。長坂寺遺跡は古代山陽道に面しており、仮称邑美（おうみ）駅家もこの付近にあったと推定されている。

## 【山陽道】さんようどう

奈良時代に政府によって整備された、平城京から大宰府に至る道。古代では最大規模の街道で、幅6～9mの道路が直線的に設けられていた。平安京に遷都後は、起点が平安京となる。外国の使節が通行することが予想されたため、同様に整備された七街道の中で、唯一の大路に格付けされて最重要視された。途中には56駅が設けられていた。

江戸時代には、古代山陽道を踏襲して西国街道が整備され、現在の国道2号線も一部で重複しながら、これに沿って設けられている。

## 【和泉式部歌塚】いずみしきぶうたづか

書写山円教寺奥の院の、開山堂北側にある石製宝篋印塔（ほうきょういんとう）。和泉式部らが中宮彰子の供をして円教寺を訪れた際、性空上人は一旦これを拒絶したが、式部が詠んだ歌に感心して一行を迎え入れたという伝説にちなむものという。

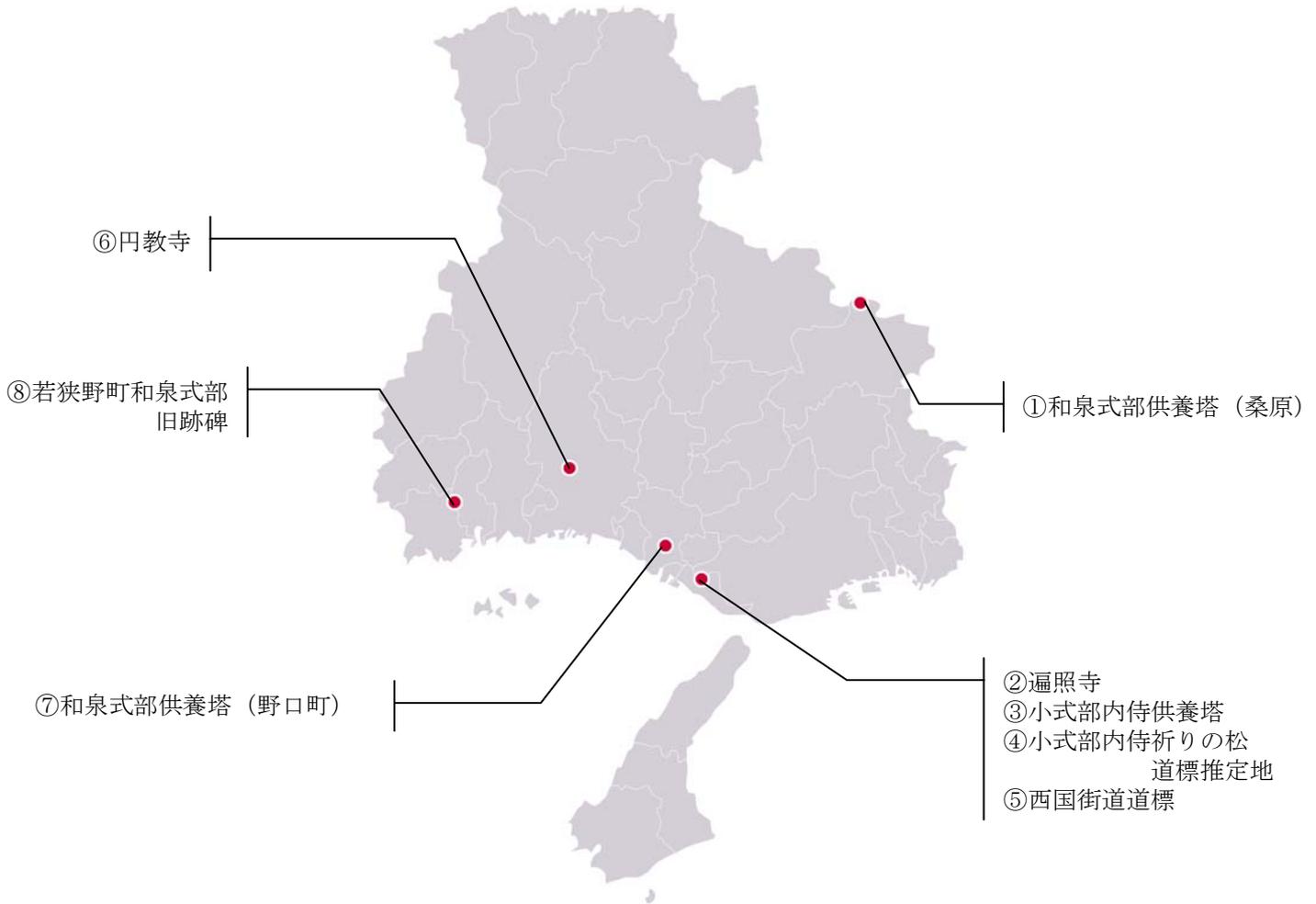
## 【和泉式部供養塔】いずみしきぶくようとう

加古川市野口町坂元所在。古くから和泉式部の墓として祭られている。旧山陽道沿いに立つ石製宝篋印塔（ほうきょういんとう）で、室町時代初期の製作と考えられている。高さ255cm。兵庫県指定文化財。

## 参考書籍

	書籍名	刊行年	著者名	発行者
伝説	丹波のむかしばなし第4集	2001	丹波のむかしばなし編集委員会	(財)丹波の森協会
	伝説の兵庫県	2000	西谷勝也	神戸新聞総合出版センター
歴史・文化等	兵庫のふるさと散歩 2. 東播編	1978	兵庫のふるさと散歩編集委員会	神戸新聞出版センター
	兵庫県大百科事典(上・下)	1983	神戸新聞出版センター	神戸新聞出版センター
	はりま伝説散歩	2002	橋川眞一編著	神戸新聞総合出版センター
	日本国内におけるシダレグリの遺伝資源(収録:『果樹研究所研究報告』第4号)	2005	壽和夫・澤村豊・齋藤寿広・田教臣	農業・生物系特定産業技術研究機構果樹研究所
その他	明石ぶらぶらみてある記	不詳	明石市観光振興課ほか	明石市観光振興課ほか

## 所在地リスト



①和泉式部供養塔（桑原）	篠山市桑原
②遍照寺	明石市魚住町長坂寺513-8
③小式部内侍供養塔	明石市魚住町錦ヶ岡3丁目
④小式部内侍祈りの松道標推定地	明石市魚住町長坂寺 旧西国街道沿い
⑤西国街道道標	明石市魚住町金ヶ崎 旧西国街道沿い
⑥円教寺	姫路市書写2968
⑦和泉式部供養塔（野口町）	加古川市野口町坂元508-2
⑧若狭野町和泉式部旧跡碑	相生市若狭野町雨内

ひょうご歴史ステーション「ひょうご伝説紀行」は、兵庫県立歴史博物館により管理・運営しております。サイトで使用するテキスト・画像などのコンテンツ全般の著作権は当館に帰属し、無断での複写・転用・転載などを禁止いたします。

### ひょうご伝説紀行

<http://www.hyogo-c.ed.jp/~rekihaku-bo/historystation/legend/>

編集発行 兵庫県立歴史博物館

〒670-0012 兵庫県姫路市本町6-8 TEL 0792-88-9011

第2刷 2009年4月1日